

平和運動分科会  
＜ベトナム反戦運動とその時代——地方ベ平連の展開＞

「地方都市におけるベトナム反戦運動——福岡ベ平連の場合」

埼玉大学・教養学部  
市橋 秀夫

キーワード：反戦運動、福岡、ベ平連、福岡ベ平連、10の日デモ、反戦青年委員会、基地、反戦フオーク

### 1. はじめに

日本におけるベトナム反戦運動についてはさまざまな形で語られてきてはいるが、本格的な実証的歴史研究はまだごく少ない。戦後の新しいかたちの社会運動として一般的に評価されてきている「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）についても、全国に400以上存在したとされる地方ベ平連の活動の詳細については、全体像をまとめた平井論文（「戦後社会運動のなかのベ平連——ベ平連運動の地域的展開を中心に——」『法政研究』71巻4号、2005年、723-55頁）以外、踏み込んだ研究は出ていないように思われる。

本報告は、地方ベ平連の中でも比較的規模が大きく、活発かつ持続的な活動を展開したと思われる福岡ベ平連の歴史研究の中間報告である。まず、史料収集の経緯とこれまでの研究経過について報告し、オーラル・ヒストリーという研究手法が地方ベ平連の研究には不可欠であることを述べる。次に、福岡ベ平連の活動を年代順に跡づける。(1) 九大10の日デモ、(2) 福岡ベ平連結成から70年安保闘争、(3) 福岡ベ平連活動の終息、以上3期にわけてやや詳しく述べていく。最後にまとめとして、福岡ベ平連の運動の特徴、その独自性や非独自性について述べる。

### 2. 史料収集および調査研究の経過： オーラル・ヒストリーの役割

本調査研究は、研究成果そのものの産出ではなく、新たな一次史料の発掘・収集・保存という目的を持って始まった。ベ平連運動に関する一次史料としては、東京ベ平連の事務局長であった吉川勇一が個人で整理・保存していた膨大な文書史料がある（埼玉大学の共生社会研究センターに所蔵、来春に立教大学に移管予定）。福岡ベ平連が発行した機関誌やビラの一部も、この吉川史料に含まれていた。

ベ平連運動については、東京や京都のいわゆる文化人参加者が著した回想録は存在する。しかし、マスコミに取り上げられるような知識人・文化人を擁することのなかった福岡ベ平連については、まとまった証言なり回想を著した刊行物は皆無である。いわゆる「無名」の運動参加当事者の人びとに話を聞かせてもらうオーラル・ヒストリーは、運動の「下からの」視点を取り入れたよりバランスのとれた歴史理解に寄与するという意義を持つ。

オーラル・ヒストリーは、文書史料の理解を助けるという役割も持つ。機関誌やビラなどの文書史料の理解は、そのテキストを綿密に読むだけで可能になるというわけではけっしてない。オーラル・ヒストリーで得られた知見によって、はじめてテキストそのものや同時代の適切な文脈の理解が可能になる、ということがある。

オーラル・ヒストリーの実践によってつくられるつながりから、未発掘の文書史料の収集が可能になる場合も少なくない。多くの社会運動や市民運動の場合、関連する文書史料を保有しているのはそれらの運動に参加した当事者だけである場合が多いからだ。

### 3. 福岡ベ平連の運動と活動

次に、3期に分けて福岡ベ平連の運動・活動の経過を追ってみたい。

#### 3-1. 九大10の日デモの時期 1965年4月-1967年12月

九州大学の教官および院生の有志がアメリカのベトナム政策とそれに荷担する佐藤政府に対する抗議声明をはじめて発表したのは、1965年4月29日（木）であった。翌30日、市内をデモ行進。650名が声明に署名し、200名がデモに参加したとされている。福岡市初の大組織の動員に基づかないベトナム反戦デモであった。その6日前の4月24日（土）に東京でベ平連初のデモ行進がなされているが、東京と連絡を取り合っていた形跡はない。福岡独自の動きであった。

福岡で定期的なデモ行動がなされるようになったのは同年秋、10月10日（日）からである。九大工学部所属の数学者と「文科系の人たち」との話し合いが9月末にもたれ、十日ごとにデモをする案が出されたという。九大の工学部応用理学科教官であった倉田令二郎（故人）は、「直接のきっかけ」は米国カリフォルニア大学バークレー校の「ベトナムの日委員会」の創設メンバーである、世界的に著名な数学者スミール教授から送られてきた『ベトナムの日委員会ニュース』<sup>1</sup>であったと記している。このように福岡では、工学部の数学者と社会党系（社会主義協会系）の文科系教官が中心となり、政党や労組など組織とは距離を置いた個人参加のベトナム反戦運動が始まった。倉田は「10の日デモ＝ベ平連ではなかったが結成にあたって東京のベ平連はかなり意識していたように思う。10の日デモはまさにベ平連方式で運営された」<sup>2</sup>とのちに述懐しているが、定期デモの発足も福岡独自、九大コミュニティ独自のローカルな動きであり、東京のベ平連とのやりとりはこの段階では行なわれていなかった。また、その後の10の日デモを具体的・持続的に担っていったのは数学系教官や学生であって文科系（社会系）ではなかったことも確認したい。

デモは毎月三回、十の日の夕刻に欠かさず行なわれた。市役所の玄関脇に「アメリカのベトナム侵略反対十の日デモ」と染め抜いた幕が張られ、三々五々人が集まったところでデモは始まった。参加者は少ないときは10人を切ることもあったが、たいていは30～40人くらい、多ければ70人くらい。月に三度、曜日に関係なく夕方6時ごろから欠かさず行なわれた反戦デモというの、例がないものだろう。

66年夏ごろから10の日デモの会の性格が変わり始めている。6月には、第1回「全国縦断反戦講演」旅行があり、九大で集会が開かれた。東京ベ平連からのいささか急な要請に応えたものだった<sup>3</sup>。8月には東京で開かれた「ベトナムに平和を！日米市民会議」に10の日デモの会の中心メンバーであった山田俊雄（九大工学部応用理学科教官・数学）が参加して定期デモの実践を呼びかけ、12月には小田実や武藤一羊といった全国的に知られたベ平連の顔を講師に呼んだ福岡反戦集会「ベトナム反戦運動とは何か」が九大で400人の聴衆とともに開かれている。翌67年の7月にも、鶴見俊輔と室謙二が講演した「ベトナム戦争反対のために今何ができるか—若い人びとと考える」が開かれ、高校生を含む80人が参加している。東京のベ平連いう「外部」との交流が断続的に持たれるようになったのである。デモの参加者も変わっていった。九大教官・学生だけでなく、労働者や市民が参加するようになっていった。

### 3-2. 福岡ベ平連結成から「安保をつぶせ！連日行動」まで 1968年1月-1970年6月

1968年1月、佐世保への米軍原子力空母エンタープライズ寄港を直接の契機として、月3回の定例デモ（+ティーチ・イン）の実施だけでは応えきれない反戦運動への衝動が福岡で、とりわけ九大で顕在化した。4月13日、九大に院生・助手・学部四年生らの九州大学反戦青年委員会が誕生している<sup>4</sup>。

佐世保は10の日デモの会に対しても甚大な影響を与えた。10の日デモの会は1月15日から22日には連日福岡市内でデモを行ない、多いときには300人が参加し、さらには、ノンセクトの学生、市民、教官の「連絡センター、救援活動など」の役割も果たしたという<sup>5</sup>。10の日デモの会はすでに定例デモに限定しきれない行動をとり始めていたのである。

その後、2度にわたる天神での反戦ティーチ・インを経て、5月11日、10の日デモ参加者の常連を母体に「福岡ベトナムに平和を！市民連合」は結成された。第1回会合のレジュメをみると、事務局体制、運動方針、当面の活動について原案が示されている。事務局長は九大法学部生の武内俊造さんが就いたものの、代表および連絡先は九大関係者ではなく市民であり、自立した市民運動として出発しようとする意図がうかがえる。運動方針は「1. 個人の創意に基づいて多様性・機動性のある運動をめざす。2. 互いの立場を尊重しながら、他の反戦をめざす諸団体、組織と共闘を進める。3. 10の日デモに積極的に参加する。4. 各ブロックは連絡を緊密にし、チーフを中心に定期的に会合をもつ。5. 定期的に機関誌を発行する」の5点が掲げられている。当面の活動としては、ピラまきやステッカー張りやカンパ活動などの情宣活動、北九州小倉にある山田弾薬庫へのデモ、反戦討論集会の開催、6月行動への取組み、アメリカの反戦運動との連絡や日米反戦市民会議への取組み、「ヤングベ平連」への働きかけ、などが列記されている。福岡ベ平連は、東京をひとつの頂点としたベ平連運動の一翼を担い、より広範囲の反戦運動の渦を巻き起こしていくことをめざし、10の日デモとは別個の運動体として発足した。

福岡ベ平連が積極的に取り組んだのは、すでに反戦青年委員会が前年から取り組んでいた山田弾薬庫撤去および弾薬輸送阻止運動への参加であった。しかし、反戦運動はもとより、福岡市民全体の反戦気運を

1 『世界』1965年10月号に全文翻訳掲載。

2 倉田令二郎「ベ平連と私」『ベ平連通信ふくおか』24号（1973年5月1日）、11頁。

3 都留大治郎から鶴見【良行？】宛手紙、1966年6月、埼玉大学・吉川勇一史料。

4 最初は社会党青年部の組織として1965年に創設された職場反戦組織であるが、急進化して、全国各地でベトナム反戦の直接行動を新左翼諸派などととともに展開していった。

5 山田俊雄「マル秘 阿P九大闘争記 P通信」no. 1、1969年11月14日。

一挙に高める事件が、福岡ベ平連発足後2週間足らずで起きた。米軍ファントム機九大墜落事件である。ファントムは6月2日に墜落したが、その翌日には福岡ベ平連のメンバーの九大学生5人が朝7時前から36時間の抗議のハンストを始めている。九大も学長を先頭に5千人が参加したデモを二日間行ない、福岡では事件後2週間以上にわたって連日学生、労働者、女性、市民のデモが展開された。福岡ベ平連も連日デモを行ない、九大キャンパスのある箱崎地区での市民署名活動にも取り組んだ。墜落後最初の10の日デモには市役所前に200人が集まったが、3キロ先の米領事館に着くころには300人以上になった。夜8時前からは100人が集ってティーチ・インが行なわれ、活発な発言が相次いだことが週刊誌でも報道されている<sup>6</sup>。

その後九大は、建設中の電算機センターに宙づりになったファントム残骸機体処理をめぐって学生間でも教員間でも学内合意が形成できず、板付基地撤去問題からは遠いところで、代々木系と非代々木系の軸を中心に学内対立が深刻化していった。福岡ベ平連とその関係者はこの問題に対して活発に発言・行動し、反戦青年委とともに大学側による機体引下ろし強行には基本的に反対する立場をとった。

九大キャンパス外においても福岡ベ平連は、東京のベ平連と連携したり、地元の他の反戦団体に呼びかけて、節目ごとに集会を成功裡に組織した。福岡ベ平連は、福岡の開かれた反戦運動の結集軸となる活動を担うようになっていた。

反戦青年委とともに山田弾薬庫撤去闘争に関わる激しい運動に積極的・持続的に取り組む一方<sup>7</sup>、11月には女性も含む社会人が参加した独自の市民運動の実験も行なわれている。天神における「シット・イン」の試みである。翌69年4月には、ささやかではあったが女性社会人二人のイニシアティブで女性による反戦デモが行なわれ<sup>8</sup>、女だけの領域というものがベ平連内でも必要とされたのであろう。

69年3月末には、小田実、鶴見俊輔、武藤一羊、高橋武智らが参加したベ平連「全国キャラバン九州行動」に福岡ベ平連は取り組んだ。このキャラバンは、佐賀、福岡、佐世保、大村収容所、長崎、熊本、鹿児島、宮崎各地を回って講演会やデモを行なったもので、福岡ベ平連にとってはその後の活動の契機となるいくつかの重要な出会いと経験がもたらされるイベントとなった。ひとつは大村収容所へのデモであり、日本の入管体制の問題を福岡ベ平連メンバーに実感させその後の取組みを促す契機となった。もうひとつは、九州だけのベ平連懇談会が持たれ、福岡だけにとどまらない反戦運動の広がりを福岡ベ平連メンバーが実感できたという。さらに、550名が参加して開かれた福岡集会では、南大阪ベ平連メンバーがフォークソングの後に夏に開く反戦万博について呼びかけを行ない、これにより福岡ベ平連の若手は、福岡ベ平連のその後の主要活動の一つとなる「反戦フォーク」の存在を知ることになる。この反戦フォークはその後ひと月足らずの4月末に「反戦フォーク・シット・イン」として実践に移され、街頭での反戦フォーク活動を行なう「福岡フォーク戦線とすてろふ」が生れ、独自の活動を行ない、独自の機関紙を出すようになった。

69年6月から70年安保にかけては、福岡ベ平連が最も多くの市民の支持を獲得できた時期であった。福岡ベ平連は「安保をつぶせ！市民集会」を計5回にわたって開催した。その第1回の集会は69年7月に九大記念講堂で開かれたが、ビラ7万枚、ポスター千枚、ステッカー5千枚、タテ看80本、街頭フォークで準備し、会場いっぱい2,000人が参加した。8月には大阪の「反戦のための万博」に参加し、ファントム墜落機の一部を会場に運び込んで展示し話題となった。しかし、このような大規模な活動を繰り返し準備することは、一部のメンバーへの過重負担（「個人原理の曲解から来る“さぼり”」）や会計上（必要経費の負担原則）の問題などをもたらした。創設時からの女性メンバーが「もう一度はじめにもどそう」<sup>9</sup>と訴えたのはこの頃である。しかし、9月の第2弾「安保をつぶせ！市民集会」の際のデモでは福岡ベ平連初の逮捕者を出し、10月の九大への機動隊導入による封鎖解除時にも逮捕者を出した。それらの救済活動も、以後福岡ベ平連の重要な取り組みの一つとなり、活動の範囲はむしろ拡張している。

69年10月の九大への機動隊導入と69年11月の佐藤訪米阻止闘争の「敗北」以後、「状況が分からない」「方向が見えず」という中で、「手さぐりの論理」ということが福岡ベ平連では確認された。70年以降の福岡ベ平連の活動は70年1月末から開催された第5回ベ平連全国懇談会の議論に影響を受けているように思われる。全懇では「帝国主義軍隊＝自衛隊解体」が確認され、「福べでも叛軍闘争はやらなアカンナということ」になり、反戦自衛官小西誠さんと呼んだ集会やビラまきなどに取り組んでいく。

<sup>6</sup> 平栗清治「現地ルポ 博多っ子はがまんできん」『朝日ジャーナル』（1968年6月23日号）、104-105頁。

<sup>7</sup> ただし、闘争の中心となった北九州反戦委員会と社青同福岡地本が「総力をあげて取り組んだ」のは1968年7月までだった。『社青同福岡地本20年史（前編）』（1979年）、69-76頁。

<sup>8</sup> 佐田展子「女性による反戦デモを行なおう！」『ベ平連通信ふくおか』7号（1969年2月15日）、12-13頁；光安美枝子「四・一二報告（……そのあまりに主観的な）」『ベ平連通信ふくおか』8号（1969年4月20日）20-21頁に報告。女性の参加者12名、男性（理対系グループ）5名。

<sup>9</sup> ふかみやすこ「もう一度はじめにもどそう」『ベ平連通信ふくおか』12号（1969年9月10日）。

しかし、1970年の前半期は反安保で、「スケジュール闘争」にはこれまでにない数の人が参加した。秋田明大が講演者の一人となった6月の第5弾「安保をつぶせ！市民集会」には1,800人の人が集まり、23日夜の警固公園でのベ平連集会にはそれまでの最大規模である3,500人がつめかけた。

### 3-3. 反基地・叛軍行動の展開と福岡ベ平連の「野たれ死に」 1970年7月-1974年

福岡ベ平連の70年安保以後の活動は、入管斗争（大村収容所撤去闘争）、反基地（対米軍基地）、叛軍行動（対自衛隊）を主軸に行なわれた。福岡の白木原（米軍住宅地）、春日原（自衛隊基地）、雁ノ巣（通信基地）、芦屋（自衛隊）、熊本の清水基地（自衛隊）、そして広島岩国米軍基地を対象に、ビラまきや叛軍放送や監視活動、沖縄派兵阻止のデモや集会を行なうというかたちで展開した。

福岡から反戦米兵が一人だけ出たこともあった。福岡ベ平連の反戦・兵役拒否のビラ入れ・よびかけに応えた白木原米軍住宅住人の空軍憲兵隊員（25歳）である。彼が原稿を書いた反戦機関誌 *Yandag* が、福岡ベ平連から発行され、全国紙上でも話題になった<sup>10</sup>。

こうした活動が持続的になされていったが、70年代終わりから71年秋までの福岡ベ平連のムードは低調だったようである。しかし、71年11月の沖縄返還協定批准阻止・派兵阻止闘争には多くの参加があり、その後は新しく加わったメンバーとともに、雁ノ巣でのビラまき、岩国での米軍基地監視や米兵への反戦呼びかけ活動、天神街頭フォーク、そして十の日デモが、地道に取り組みられた。

ほかに、伝習館教員処分問題や、水俣をはじめとする九州各地での反公害運動なども展開されたが、福岡ベ平連に関わる者が個人で参加することはあっても、ベ平連が運動体としてこれらにコミットしていくことはなかった。また、街頭フォーク活動もどこか物足りないものと感じられるようになり、反戦歌のリアリティも新たな状況の中で失われていた<sup>11</sup>。

福岡における米軍基地は、71年以降順次返還されていく。板付基地は69年5月に常駐機がいなくなり予備基地化し、71年7月には管制権も日本側に移管され、72年4月には米軍板付基地は福岡空港として運輸省の管轄下に入った。72年2月には山田弾薬庫が全面返還され、雁ノ巣での福岡ベ平連のビラまきも返還を控えて5月末で終了している。

1973年1月27日、ベトナム和平協定が調印された。3月25日に開かれた福岡ベ平連の討論集会（九大工学部応用理学教室）では解散論議が起こったが、選択されたのは「野たれ死に」だった<sup>12</sup>。福岡ベ平連の活動がどのように終息したのかについては関係者からの話でもはっきりしない。『ベ平連通信ふくおか』の27号が1974年2月4日に発行されているが、これがおそらく機関誌の終刊号であろう。

## 4. 福岡ベ平連運動の特質

福岡ベ平連の性格と特徴についていくつか簡単にまとめておきたい。福岡ベ平連の母体となった十の日デモは、ベトナム反戦運動にコミットする数学者の国際ネットワークにつながっていた九大の数学者と、社会主義協会系の文系教官という一見奇妙な同盟関係を基盤に発足している。その後生まれた福岡ベ平連の活動もまた、東京のベ平連運動から強い影響を受けつつも、九州の労働運動をバックボーンにした地域の反戦青年委員会との強い協力関係の上に展開されていった。それらに比すれば、新左翼諸セクトとの関係はむしろ周縁的であったといってもよいかもしれない。ただし、東京ベ平連同様、福岡ベ平連の運動には共労党活動家が少なからず関わっており、その共存関係を否定することもまたできないように思われる。

福岡とその周辺には米軍基地が多数存在し、それが福岡ベ平連の運動を一貫して特徴づけていた。佐世保エンタープライズ、山田弾薬庫、ファントム墜落と板付基地の問題や事件が、福岡の反戦運動にリアリティある目標を提供し、そのあり方を規定した。岩国米軍基地闘争に対する、京都ベ平連にはみられないコミットメントがみられたのも、福岡や北九州における反基地闘争の経験の蓄積と無関係ではあるまい。逆に、70年代に相次いだ米軍基地返還はそうした闘争の焦点の喪失を意味したといえる。その意味で、福岡ベ平連の反戦運動は、九大を無視して語ることはできないものの、東京や京都のようないわゆる知識人や文化人が牽引した反戦運動とは大きく性格を異にするものであった。

「大状況から個別・地域へ」ということが60年代末から70年代の社会運動の動向としていわれてきたが、福岡ベ平連の経験はこの図式にすんなりとはあてはまらない。福岡ベ平連が最初に担ったのは、山田弾薬庫をめぐる「個別・地域」闘争であった。69年6月から70年6月の時期には反安保という「大状況」をにらんだ大集会やデモが取組の前面に出てきたが、その後はふたたび地域での反基地・叛軍行動への取り組みが主となった。かといって、福岡ベ平連の反基地・叛軍斗争が大状況を無視したものであったわけではない。福岡ベ平連は一貫して、大状況につながっていくものとしての個別・地域の運動を担ったのである。

10 『朝日新聞』東京本社版（1970年9月26日）および『読売新聞』東京本社版（1970年9月27日）。

11 いけだけい「老いたゲリラの唄」『ベ平連通信福岡』23号（1973年3月10日）。

12 石崎昭哲「野たれ死には覚悟の上だ」『ベ平連ニュース』92号。